日本語における自他交替「切る」「切れる」と語彙概念構造

佐藤　聖

0．はじめに

本稿では、日本語の「切る」「切れる」という自他交替現象を扱い、この動詞が自他交替を許す場合と許さない場合とでは、語彙概念構造が異なるということを主張していく。そして、この語彙概念構造の決定には、どのような項を他動詞用法の目的語、つまり内項として選択するかということが深く関与しているということを論じる。さらに、本稿での分析は、語彙概念構造が語彙記載項の外にある独立したレベルに存在するというモデルを動機づけるものであるということを示唆していく。

1．英語の動詞 cut の自他交替

本節では、英語の動詞 cut が、使役動詞であるにも関わらず自他交替を示さないという事実と、この事実に対する分析を行っている先行研究を見ていく。

英語においても日本語においても、使役を表す動詞には通常、自動詞と他動詞の対応が見られる事が知られている。

(1) a. John broke the door.
　　b. The door broke.

(2) a. 太郎はドアを壊した。
　　b. ドアが壊れた。

これらの自他交替を表す動詞についての一般的な分析は、この種の自他交替を示す動詞は主に状態変化を表すもので、動詞の意味として(3)のような語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure、以下では LCS と呼ぶ)を持つというものである。[1]

(3) [[x ACT] CAUSE [y BECOME <*STATE*>]]

この LCS は、x が何らかの行為を行うという起因事象と、その結果として y の状態が変化するという結果事象とから成っている。

しかしながら、一見、主語で表される個体 x の対象物 y に対する働きかけと目的語で表される対象物 y における状態変化から成る事象を表していると思われる動詞でも、cut は自他交替を示

[1] Levin and Rappaport Hovav (1995) 参照。

さないことが知られている。

(4) a. Margaret cut the bread.
b. *The bread cut. (Levin 1993; 29)

Hale and Keyser (1987) によると、cut は(5)の LCS を持つ。[2]

(5)[x CAUSE [y develop linear separation in material integrity …]]

この Hale and Keyser (1987) の分析が正しいとすると、(3)と同じ構成、つまり x の行為と y における状態変化という 2 つの下位事象から成るLCSをもつのにも関わらず、なぜ*cut* は自他交替を許さないのか、ということが問題となる。

この*cut*が自他交替を示さないという現象の説明として、Levin and Rappaport Hovav (1995)、影山 (1996) そして鷲尾・三原 (1997) は、ほぼ同様の分析を行っている。これらの分析は、概略、cut という動詞で表される事象は動作主による特定の行為を含意するので、この行為を行う動作主が必ず共起しなくてはならない、というものである。確かに、鷲尾・三原 (1997) で示されているように、英語の cut は、その語彙的な意味として「ナイフなどの鋭利な道具を使って」という特定の様態を含んでおり、従ってその様態を具現すべき動作主の生起が要請されると考えるのが妥当であると思われる。

(5) *cut*の意味: "to do something using a sharp edge of instrument" —*LDCE*
(鷲尾・三原 (1997; 74) より引用)

2. 日本語の自他交替「切る」「切れる」

本節では、日本語の自他交替「切る」「切れる」に対して、第 1 節で見た英語と同様の分析を行った場合の問題点についてみていく。

2. 1. 日本語の自他交替に関する分析の問題点

それでは、第 1 節で見た英語における*cut*の自他交替の分析をふまえ、日本語の「切る」「切れる」という自他交替現象に目を向けてみることにしよう。日本語では、他動詞「切る」の語幹 (kir-) に接尾辞 (-e-) を付加することによって、容易に自動詞「切れる」を派生できることから、「切る」という動詞が自他交替を示すことがわかる (鷲尾・三原 (1997) 参照)。実際、英語

---

[2] Hale and Keyser (1987)では、動詞が中間構文に生じるためには、その LCS に CAUSE という概念が含まれていなくてはならないと主張している。

(i) a. This bread cuts easily.
b. LCS of *cut*: [x CAUSE [y develop linear separation in material integrity …]]
(ii) a. *This wall hits easily.
b. LCS of *hit*: [x come forcefully into contact with y]

では許されない他動詞構文と自動詞構文の対応が、日本語では許される。

(6) a. John cut the rope.
　　b. 太郎はロープを切った。

(7) a.*The rope cut.
　　b. ロープが切れた。

さらに興味深いことに、日本語では、切られる対象物によって、自動詞構文が許される場合と許されない場合とがある。これは、常に他動詞用法しか許されない英語の cut には観察されない現象である。

(7) a. 太郎はロープ／紙／糸を切った。
　　b. ロープ／紙／糸が切れた。

(8) a. 太郎はケーキ／爪を切った。
　　b. *ケーキ／爪が切れた。

(6-8) に示される事例は、非常に興味深い問題を提示している。まず、英語の cut と日本語の「切る」は同じような事象を表すと考えられるのにも関わらず、日本語の場合のみ自動詞用法が許されるのはなぜかという問題がある。日本語における「切る」という出来事 (event) が動作主による行為と対象物における変化という事象から成っていると考えるのは、自然であると思われるが、日本語と英語の両方に(3)のようなLCSを仮定する分析では日本語と英語の差異を捉えることはできない。また、英語の cut では、特定の様態が含意されるため必ず動作主を表す主語と共起しなくてはならないということで、自動詞用法が許されないという事実が説明されていたが、(7a, 8a) における日本語の「切る」の場合も「鋭利な刃物を使って」という含意は（必ずではないが）存在する。従って、上で見た英語の cut に対する分析を日本語に適用しても、日本語の事実を正しく捉えることができないのである。

第二に、動詞が生じる統語フレームがどのようにして決定されるのかという問題がある。仮に、動詞の持つ意味、すなわち LCS が、その動詞が生じる構文を決定するとすれば、(7)の「切る」と(8)の「切る」はそれぞれ別個の LCS を持つということになる。すると、形態論的には同じで、且つ似たような出来事 (event) を表すにも関わらず、この 2 つの動詞「切る」は別個の動詞として語彙目録にそれぞれ記載されていなくてはならない。しかしながら、これは非常に不自然であるし、切られる対象物によって動詞が異なるのでは、どのような内項を意味的に選択するのかをいちいち個々の語彙記載項で指定しておかなくてはならず、語彙目録が膨大な量となり言語習得上の負担が非常に大きくなってしまう。

この第二の問題に関して、(7)の「切る」と(8)の「切る」はそれぞれ別個の LCS を持つという望ましくない仮定を避ける分析として、上で触れた影山 (1996) や鷲尾・三原 (1997) があげられる。彼らの分析は、他動詞「切る」と自動詞「切れる」が同じ LCS を持ち、反使役化という操作によって他動詞から自動詞を派生的に得るというものである。そして、反使役化の適用の可

否は、表される出来事（event）の成立において人間の特定の意図が必要とされるか否かによって決定される。以下で、簡単に鷲尾・三原（1997）の分析を概観することにしよう。

2．2．鷲尾・三原（1997）

鷲尾・三原（1997）では、反使役化は状態変化を表す動詞にのみ適用でき、結果状態を含意しない行為だけを表す動作動詞には適用できないという分析を行っている。ただし、状態変化を表す動詞（つまり結果状態を含意する動詞）でも、(9)のように反使役化を適用できないものも存在する。

(9) a. 誰かが彼を暗殺した　～　*彼が暗殺した（*i.e.*, 暗殺された）
　　b. Someone murdered him. ～　*He murdered (*i.e.*, He was murdered).
（鷲尾・三原 1997; 74）

この事実を捉えるために、鷲尾・三原（1997）は状態変化動詞を(10)のように下位分類し、(10a）の自発的な状態変化を表す動詞にのみ反使役化が適用できると主張している。

(10) 動詞が記述する状態変化
　　a. 動作主である人間が関与しなくても発生し得るもの
　　b. 人間が特定の意図をもって（あるいは特定の仕方で）行う行為によってのみ成立するようなもの
（鷲尾・三原 1997; 74）

この分析によると、英語の cut の場合、上の(5)で見たように常に「鋭利な道具を使って」という特定の様態を語彙的意味として指定しており、よって、この「鋭利な道具」を使用する動作主の存在も常に含意される。従って、(10b）に該当することとなり、反使役化を適用することができない。これに対し、日本語の「ロープを切る」の場合は、必ずしも鋭利な道具の使用を含意しないため動作主の存在の含意も要請されず、反使役化の適用が可能であり「ロープが切れた」という自動詞用法が可能になるのである。他方、同じ「切る」という動詞でも、(10b）に該当する状態変化を表すときは、(11)に示されるように反使役化を適用できない。

(11) a. 庭師が木の枝を切った ～　*木の枝が切れた[3]
　　b. 駅員が切符を切った ～　*切符が切れた
　　c. 爪を切った ～　*爪が切れた
（鷲尾・三原 1997; 75）

鷲尾・三原（1997）の分析によると、日本語の「切る」「切れる」は基底では他動詞であり、この動詞がどのような状態変化を語彙的意味として指定しているかによって反使役化の適用の可否が決定される。この場合、反使役化の適用が可能な動詞と不可能な動詞とで異なるLCSを仮定する必要はなく、第二の問題を回避しているように思われる。しかし、(10)の分類をよく考察し

[3] 「可能」のよみの場合は、この自動詞用法は適格であるが、本稿では「可能」の解釈は考慮に入れない。

てみると、反使役化の適用可能性が動詞の語彙的意味だけで決定されているのではないことが分かる。(10)は、言い換えると、動詞によって表される出来事(event)に対し、動作主がどのように関与しているかということで分類されているのである。つまり、(10a)の場合は、動作主は状態変化の起因(CAUSE)のみに関与し、他方(10b)では動作主は状態変化という下位出来事(subevent)の遂行にも関与している。そして、この動作主の下位出来事(subevent)への関与の仕方は、どのような項を目的語として選択するかで異なっている。このことは、(11)の自動詞用法の非文法性と(12b)の文法性の対照から明らかである。

(12) a. ロープ／糸／紙を切る
　　 b. ロープ／糸／紙が切れる

ここで、第三の問題が生じる。それは、反使役化の適用の可否は動詞の意味だけでは決定できないが、そもそも動詞「切る」(kir-)の語彙的に指定されている意味とは何か、そしてこの動詞の語彙的意味は他動詞の目的語として生じている項の意味とどのような関係にあるのかという問題である。これは、すなわち、動詞が本来的に持つ語彙的意味と、その動詞が生じることのできる統語フレーム(構文)との関係は、どのようなものであるかという問題につながる。

以上、第2節では、英語の*cut*の自他交替に対する分析を日本語の「切る」「切れる」という自他交替に適用しても、日本語の事実を正しく捉えることができず、動詞の語彙的意味と統語領域における振る舞いとの関係を説明できないということを論じた。また、鷲尾・三原(1997)の分析は、日本語の「切る」「切れる」という自他交替現象とその基底である他動詞の目的語に関する意味的選択との関係を捉えることができないということを示した。

3.「切る」「切れる」の意味構造と統語領域との関係

本節では、日本語の「切る」「切れる」という自他交替の分析を行うことによって、動詞の意味と統語フレーム(構文)との関係を明らかにしていく。

3. 1. イベント構造

本稿で提案するモデルは、語彙記載項において動詞の語彙的意味と項構造が決定され、動詞が表す出来事(event)の解釈は語彙記載項の外で決定されるというものである。[4] 動詞が表す出来事(event)の解釈は、語彙記載項の外にある可能な出来事(possible event)の目録によって決定される。本稿では、Rappaport Hovav and Levin (n.d.)に従って、Vendler (1957)やDowty (1979)による動詞の相特性の分類で定義される語彙意味鋳型(lexical event structure templates)(13)を仮定し、さらにこれらの鋳型から成るレベルが語彙記載項の外にあると仮定し、このレベルをイベント構造(event structure)と呼ぶ[5, 6]。

---

[4] Ritter and Rosen (1996)でも同様のモデルが提示されている。

(13) a. [x ACT $_{<MANNER>}$ (y)] (activity)
b. [x <*STATE*>] (state)
c. [BECOME [x <*STATE*>]] (achievement)
d. [x CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]] (accomplishment)
(Rappaport Hovav and Levin (n.d.); 5)

ここで仮定するモデルでは、語彙記載項で指定されている項構造内の各項が(13)の語彙意味鋳型の変項((13)のxやy、すなわち動詞によって表される出来事(event)の参与者)と同定されることによって、動詞の語彙記載項とイベント構造が関係づけられる。そして、このイベント構造が統語構造への項の写像の仕方を決定する。

さらに、自他交替が認可されるか否かは、動詞がどのようなLCSを持つかということによって決定されると考え、(14)のLCSに課せられる認可条件を仮定する。

(14) 動詞のLCSにおいて各下位事象が成立するためには、それ自体1つの事象と見なされるのに十分な変項(義務的な項)を保持しなくてはならない。

(14)の制約が意味するところを、(15)の具体例に照らして見ていくこととしよう。

(15) a. [x ACT $_{<MANNER>}$ (y)] (activity)
b. [x ACT $_{<MANNER>}$ y] (activity)
c. [x <*STATE*>] (state)
d. [BECOME [x <*STATE*>]] (achievement)
e. [x CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]] (accomplishment)

(15a)の(y)の括弧の表示は、この項が随意的なものであることを示している。すると、(15a)では、y項が生じなくてもLCSが一つの完全な事象として認知されるため、x項さえ生じていれば(14)に抵触しない。ところが、(15b)の場合は、x項とy項が共に義務的な項であるため、どちらか一方の項が生じていないと、(14)によって排除されることになる。(15c)と(15d)は一つの下位事象を含んでおり、義務的な変項もそれぞれ一つである。従って、両者においては必ずこの変項が保持されていなくてはならない。(15e)はx CAUSEという起因事象とBECOME [y <*STATE*>]という結果事象の2つの下位事象からなっている。そして、それぞれの下位事象

---

[5] Rappaport Hovav and Levin (n.d.)では、accomplishment verbsに対し、もう一つ(i)のような鋳型を仮定しているが、ここでは採用しない。

(i) [[x ACT $_{<MANNER>}$] CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]]

[6] Rappaport Hovav and Levin (n.d.)で仮定している語彙意味鋳型は、Vendler (1957)やDowty (1979)による動詞の相特性の分類で定義されるものであるが、本稿では語彙意味鋳型と相特性の相関については特に扱わない。とりわけ、ここで採用していくACTという概念については、この概念をLCSに含む動詞がactivityという相特性を持つことを示すのではなく、主語項として意図を持った動作主を選択し動詞が動作を表すということを示すものであると解釈することにする。つまり、ここでのACTという概念は中村(1995)のDOという概念に相当するものである。注8も参照。

が義務的な変項を一つずつ含んでいる。従って、(14) によると、x 項と y 項はそれぞれ保持されなくてはならない。しかしながら、x 項が生じない場合は x CAUSE という起因事象は成立できないが、BECOME [y <*STATE*>] という結果事象は成立する。よって、この場合は、動詞は (15d) の LCS を持つ自動詞として生起するのである。そして、このように何らかの要因によって (15e) の起因事象の x 項が生じていないのが、自他交替における自動詞なのである。他方、(15e) において、y 項が生じない場合は、BECOME [y <STATE>] という結果事象が成立できず、よって、全体として一つの完全な事象が成立しないため、(14)によって排除される。したがって、自他交替を認可する動詞は、(15e) の LCS を持たなくてはならないということになる。

(14)によると、日本語の「切る」という動詞には自他交替を認可するものとしないものがあるという事実から、(15e) の LCS を持つ場合と持たない場合があると予測されるが、実際「切る」の LCS はどのようなものなのだろうか。以下で、「切る」「切れる」という自他交替の具体的な分析を見ていくことにしよう。

3．2.「切る」「切れる」の語彙概念構造

鷲尾・三原 (1997) によると、日本語では接尾辞 (-e-) が存在し、これは他動詞の語幹に付加して自動詞を派生する機能を持つ。従って、「切る」「切れる」の交替の場合、他動詞「切る」の語幹 (kir-) に接尾辞 (-e-) が付加して自動詞「切れる」が派生されることになり、他動詞から自動詞が派生するということが形態論的に明示されていると考えられる。このことから、「切る」の語彙的意味は他動詞として指定されていると仮定したうえで、(16-17) の意味構造について考察していくことにしよう。

(16) a. 太郎はケーキを切った
　　 b. *ケーキが切れた

(17) a. 太郎はロープを切った
　　 b. ロープが切れた

(16a, 17a) に示されるように、「切る」という他動詞は、その項に対して自動詞用法のような制限を課さない。よって、(16a) と (17a) の基底の他動詞「切る」は、語彙的意味と項の意味選択制限において全く同じであると予測される。

しかしながら、事実はこの予測に反する。以下の事例を考えてみよう。[7]

(18) a. 太郎はケーキを切りそうになった

[7] この例文で採用しているテストは、英語の almost の解釈について Dowty (1979) が取り上げているものである。Dowty によると、動詞によって表される行為を始めそうになったという開始の解釈は activity と accomplishment の場合に得られるが、動詞が表す出来事が遂行されて完了しそうになったという解釈は accomplishment の場合にのみ可能である。ここでは、動詞の相特性については言及しないが、activity は単一の事象から成り accomplishment は二つの下位事象から成っていることから、動詞によって表される出来事がいくつの事象から成っているかを判断するテストとして採用している。

b. 太郎はロープを切りそうになった

(18b) は多義的である。まず一つめの解釈として、太郎が「切る」という行為を始めそうになったという解釈がある。さらに、もう一つの解釈として、太郎が何らかの行為を行ったため、いまにもロープが切れそうになったという解釈がある。この第二の解釈の場合、太郎がその行為を行うに当たって、意図的であったかどうかは指定されない。すなわち、太郎が意図的に何かをした結果、ロープが切れそうになったという解釈も、太郎が不意につまずくなどしてロープが切れそうになったという解釈も成り立つのである。他方、(18a) の文では、第一の解釈、つまり、太郎が「切る」という行為を始めそうになったという解釈しか存在しない。太郎が何らかの行為を行った結果、ケーキが今にも「切れた状態」になりそうになったという解釈は得られないのである。

この事実は、(18b) の他動詞用法の場合、動詞が表す出来事 (event) が二つの下位事象から成っていることを示している。出来事 (event) が二つの下位事象を含んでいるため、どちらの事象が「～しそうになる」という句によって修飾されるかによって異なる解釈が得られるのである。他方、(18b) の他動詞用法の場合、動詞が表す出来事 (event) は下位事象を含まない全体としてひとつの事象である。そのため、(18b) は多義性を示さないのである。すなわち、上で述べた予測に反し、(16a, 17a) の他動詞「切る」の意味はそれぞれ異なっており、イベント構造で関連づけられる語彙意味鋳型も異なっているということになる。

この事実をうけて、ここでは (16a, 17a) の他動詞「切る」はそれぞれ異なる LCS (19) と結びつけられていると仮定する。[8]

(19) a. 太郎はケーキを切った
b. [x ACT <*MANNER*> y to have y separated]

c. 太郎はロープを切った
d. [x CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]]

(19a) は、動作を表す動詞 (activity verb) であり、他方 (19c) は状態変化を表す動詞である。この仮定は、私たちの日本語の直感にも合う。例えば、「太郎がケーキを切った」と言った場合、そのケーキは分割されているという点で元のケーキとは異なるが、依然としてケーキとしての役割を果たす個体のままである。これに対し、「太郎がロープを切った」と言った場合、そのロープはロープとして意図されていた役割を果たせない個体になってしまう。つまり、本質的な状態変化が起こっているといえるのである。[9]

さらに、(19a) と (19c) とが異なる LCS に結びつけられていることの証拠となる事実がある。

---

[8] (19b) の ACT は、この動詞が動作主による動作を表すものであることを示すものである。LCS と動詞の相特性との関係は、本稿では特に扱わない。実際、日本語の「切る」の相特性は、(13a) で Rappaport Hovav and Levin (n.d.) が意図している本来的な activity とは異なり、「食べる」などと同様の相特性を示していると思われる。

(i) a. John walked for an hour／*in an hour.
b. John ate an apple *for an hour／ in an hour.
(ii) a. 太郎は1時間歩いた。／*太郎は1時間で歩いた。
b. *太郎は1時間リンゴを食べた。／太郎は1時間でリンゴを食べた。
(iii) *太郎は1時間ロープを切った。／太郎は1時間でロープを切った。

(20-21) の例文について考えてみよう。

(20) a. 太郎はケーキ／爪を切った。
　　b. *このケーキ／中指の爪はよく切れる。

(21) a. 太郎はロープ／糸を切った。
　　b. このロープ／この糸はよく切れる。

(20b) と (21b) に示されている文は、中間構文と呼ばれるものである。Hale and Keyser (1987) や Rapoport (1988) によると、この構文が適格になるためには、(22) に示されるように基底となる動詞の LCS に CAUSE という概念が含まれていなくてはならない。

(22) [x CAUSE [y …]]

この分析が正しいとすると、(20b) の非文法性から、基底である (20a) の他動詞「切る」は、その LCS に CAUSE という概念を含まないということになる。他方、(21b) は文法的であることから、(21a) の他動詞「切る」は、その LCS に CAUSE という概念を含むということがわかる。

以上により、他動詞「切る」について、自他交替を許す場合は、その動詞は二つの下位事象から成る出来事 (event) を表し、その LCS に CAUSE という概念を含む — つまり、(19d) の LCS をもつということがわかった。他方、自他交替を許さない他動詞「切る」については、この動詞が LCS に CAUSE を含まず、全体として一つの事象である出来事 (event) を表す— つまり、(19b) の LCS を持つということがわかった。

しかし、ここで反論が思い浮かぶ。もう一度 (19) ((23) として再掲) について考えてみよう。

(23) a. 太郎はケーキを切った
　　b. [x ACT <*MANNER*> y to have y separated]

　　c. 太郎はロープを切った
　　d. [x CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]]

(23) によると、形態論的に同じ他動詞「切る」でも、(23a) の「切る」は動作を表す動作動詞 (activity verb) であり、(23c) の「切る」は状態変化を表す動詞 (change of state verb) である。この分析が正しいとすると、上でも述べたように、(23a) では目的語「ケーキ」における本質的な状態変化は含意されないが、(23c) では目的語「ロープ」における本質的状態変化が含意されるはずである。つまり、(23a) では、ケーキを切った後でも、やはりケーキとしての役割を果たせる本質を維持しているが、(23c) の場合はロープを切ったら、もはやロープとしての本質的機能は保持していないという解釈が予測される。

---

[9] 「太郎がロープを切った」の場合、何かに使う目的で意図的に長すぎるロープを適当な長さに切断したという解釈もある。この解釈では、ロープは依然としてロープであり、状態変化は起こっていない。この解釈の場合は、(19b) の LCS に結びつけられていると考えられる。この多義性については、後ほど述べることとする。

しかしながら、何らかの目的でロープを使用するために適切な長さにロープを切断したという文脈においても、(23c) は適格である。この解釈の場合は、(23c) でも目的語「ロープ」における本質的状態変化は含意されておらず、従って、動詞「切る」は 予測に反して(23d) の LCS を持たないということになる。

実際のところ、何らかの目的を持って意図的にロープを切断するという解釈の場合、(23c) の「切る」の LCS は (23d) ではなく、(23b) であると考えられる。つまり、同じ「太郎がロープを切った」という文でも、その解釈によって動詞が異なる LCS を持つのである。(24) の例文を見てみよう。

(24) a. ??太郎は (ナイフで) ケーキを切ったが、切れなかった。[10]
b. ?太郎ははさみでロープを切ったが、切れなかった。
c. *太郎は皿を割ったが、割れなかった。

(24c) の「割る」は、状態変化動詞である。従って、(23d) の LCS を持ち、動作主による行為と目的語によって表される個体における状態変化を含意する。そのため、「割れなかった」という表現が、「皿を割った」という部分に含意される状態変化と矛盾することとなり、(24c) は非文法的となっている。これに対し、(24a) ではケーキにおける本質的状態変化が含意されないため、「ケーキを切った」と「切れなかった」の解釈は矛盾することがなく、非文として排除されない。これと同様の説明が (24b) にも当てはまる。(24b) の「ロープを切った」はロープにおける本質的状態変化を含意しないため、「切れなかった」という解釈と矛盾しない。つまり、(24b) の「切る」は (23b) の LCS を持つ動作を表す動詞 (activity verb) であり、「切れる」の基底となっている他動詞「切る」は (23d) の LCS を持つ状態変化動詞である。(25) に示す事実は、この説明を裏付けるものである。

(25) *太郎はロープにつまずいてロープを切ったが、切れなかった。

(25) において、太郎がロープを切ったのは、たまたまロープにつまずいたためであって、非意図的である。よって、この場合の「切る」は (23b) の LCS をもつ動作を表す動詞ではなく、(23d) の LCS を持つ状態変化動詞であると考えられる。なぜなら、(23b) の LCS をもつ動作を表す動詞は、常に意図的な解釈しかもたらさないからである。[11] すると、「切れる」は必ず状態変化を表すので、「つまずいてロープを切った」は「切れなかった」とは解釈が矛盾し、共起できないと予測される。そして、実際 (25) は非文となっている。従って、(23c) の「太郎はロープを切った」の動詞「切る」は、その動詞が生じている文脈によって (23b) の LCS を持つ場合と (23d)

---

[10] (24a) の容認可能性が (22b) よりも若干落ちるのは、「ケーキが切れた」という自動詞構文が非文であることに起因すると考えられる。また、(24a,b) が完全に文法的でないのは、他動詞「切る」に含意される「分割」という結果状態に対する指向が、「切れなかった」の状態変化の未達成という含意と矛盾するためであると思われる。

[11] 他方、状態変化動詞の場合は、LCS に CAUSE という概念が含まれているため、状態変化をもたらす起因となる行為については意図的なものと非意図的なものの両方が生起可能である。すなわち、「ロープを切った」の「切る」という他動詞の解釈としては、意図的な行為のみを表す動作動詞としての解釈と、状態変化動詞で起因事象として動作主の意図的行為を含む解釈と非意図的行為を含む解釈の三つが可能であるということになる。

のLCSを持つ場合があるということになる。他方、(23a)の「ケーキを切った」の場合は、(26)に示されるように、そもそも非意図的な行為の解釈を持たない。

(26) *太郎は不意に／たまたまケーキを切った。

この事実は、(23a)がどのような文脈においても、必ず(23b)に示されるLCSをもつ動作動詞であり、直接目的語としてケーキという項を選択するときは状態変化動詞ではあり得ないという分析を支持するものである。

さらに、ここで注意しておきたいのは、(24a)の「ケーキを切る」の場合、「ナイフで」とう道具を表す項が具現化していなくても、常に「道具を使って」という含意がある。よって、必ず特定の様態が表されるため、意図を持った動作主と共起することが要請される — すなわち、LCSにはCAUSEという概念ではなくACTという概念を含んでいなくてはならないということである。そのため、(26)に示されるように非意図的な解釈が得られない。

以上、本節では、「切る」は直接目的語にどのような項を取るかということと、どのような文脈に生じるかということによって、そのLCSが異なるということを主張した。そして、自他交替が可能なのは、LCSにCAUSEという概念を持つ状態変化動詞として生じている場合のみである。(27-29)に具体的な分析をまとめておこう。

(27) 動作動詞：意図的行為の解釈のみ許す
　a. 太郎はケーキ／爪を切った。
　b. [x ACT <*MANNER*> y to have y separated]
　c.*ケーキ／爪が切れた。

(28) 状態変化動詞：起因事象である行為として、意図的なものと非意図的なものが可能
　a. 太郎はロープ／糸を切った
　b. [x CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]]
　c. ロープ／糸が切れた

(29) 動作動詞：意図的行為の解釈のみ許す
　a. 太郎はロープ／糸を切った
　b. [x ACT <*MANNER*> y to have y separated]
　c. ロープ／糸が切れた[12]

ここで、「切る」という動詞が自他交替を示すかどうかということを決定しているのは、動詞が表す出来事(event)の動作主に意図性が認められるかどうかということではない、ということに注意してもらいたい。自他交替を容認する動詞は、そのLCSにACTという概念を含む動作動詞ではなく、CAUSEという概念を含む状態変化動詞でなくてはならない。

---

[12] 原理的に、(29c)は非文法的であると予測されるが、事実は予測に反し文法的である。このように(29a)の動作動詞のLCSを持つにも関わらず自動詞用法が可能なのは、形態論的に全く同じ状態変化動詞の自動詞(28c)が存在するために、状態変化動詞へのシフトが行われるためであると考えられる。

そして、動詞「切る」がCAUSEという概念を含むLCSを持つかどうかを決定する要因となっているのは、この動詞が目的語（内項）としてどのような項を選択するかということである。(27-29）の例文について考えてみると、意図的行為を含むかどうかということでは、(28)の状態変化動詞と(29)の動作動詞は区別できない。なぜなら、(28)の状態変化動詞は、(29)の動作動詞と同様に、意図的行為が動詞の表す出来事（event）に含まれるという解釈を許すからである。しかし、目的語に目を向けると、これが「ケーキ」や「爪」の場合は、動詞「切る」は動作動詞にしかなり得ないが、「ロープ」や「糸」などを目的語として選択している場合は、状態変化動詞である可能性があるというように区別されるのである。従って、ここで重要なのは、動詞がどのような出来事（event）を表すのかということの決定において重要な役割を果たしているのは、表される出来事（event）に動作主の意図性が認められるかどうかではなく、目的語（内項）としてどのような項を選択するかである、ということである。つまり、他動詞が自他交替を示すかどうかということの決定要因となっているのは、目的語の項（内項）の意味的選択なのである。[13]

3．3.「切（る)」(kir-）の語彙的意味とLCS、統語構造との関係

さて、前節で、同じ形態の動詞でも自他交替に関しての振る舞いに差があるのは、動詞がどのような項と共起するかによって、そのLCSが異なっているからであると主張してきた。ここで注意しておきたいのは、LCSは構文が表すイベントを指定するものではなく、動詞そのものが表すイベントを決定するものである、ということである。そうすると、形態論的に全く同じ「切る」という動詞が、2種類の異なるLCSと結びつけられるということになるが、これはどのようなことを意味するのだろうか。以下で、自他交替の具体的なメカニズムを見ながら、動詞の語彙的意味とLCS、統語構造との関係について考えていく。

まず、ここで問題となるのは、LCSがどのようなレベルにあるのかということ、つまり語彙記載項内で指定されるものなのか、そうではないのかということである。LCSは、動詞によって表されるイベントの構造を指定するものなので、語彙記載項内にあると考えることができる。実際、Rappaport Hovav and Levin (1998)では、このようなモデルを仮定している。このモデルでは、形態論的に同じ動詞「切（る)」でも、語彙記載項における指定が異なっている（つまり、異なるLCSを持つ）ということから、離散的な下位クラスにおいて、それぞれ異なる動詞として別個なクラスに分類されることになる。[14] しかしながら、他動詞「切る」において状態変化動詞と動作動詞の二種類を仮定するのは不自然であり、言語獲得に際するコストも高くなる。さらに、(28-29)で見たように、全く同じ項を選択した場合でも、動詞のLCSが異なっている場合がある。「太郎がロープを切った」の「切る」に関して、一方が動作動詞として、他方が状態変化動詞として語彙記載項で指定されている別個の動詞であるとは考えにくい。また、一方のLCSから他方のLCSを派生するという方法（Levin and Rapoport (1988)のLexical Subordinationなど）も考えられる。しかし、「切る」に認められる二つのLCS間には、その事象構造において共通性が全く見られないことから、派生によって二つのLCSを関連づけることはできない。

---

[13] 小野（2000）でも、他動詞の統語的振る舞いの決定に関与しているのは、動作主の意図性ではなく内項の意味的選択であると主張している。

[14] 離散的な動詞クラスを仮定する分析に関するより詳しい議論は、小野（2000）を参照。

したがって、本稿では上でも述べたように、LCSは語彙記載項の外にあるレベルであるイベント構造に存在すると仮定する。そして、語彙記載項では動詞の最小限の語彙的意味と項構造だけが指定されると仮定する。すると、動詞「切る」の語幹(kir-)については、語彙記載項において(30)のような指定が行われていると考えられる。

(30)「切(る)」(kir-)の語彙記載項
　a. 語彙的意味:「分離という状態が生じる」
　b. 項構造:((x), y)　((x)は、x項が随意的なものであることを示す)

イベント構造では、(30)の指定事項と融合可能な語彙意味鋳型が選択され、その鋳型の項について意味的同定が行われる。その結果、各動詞に個別の具体的な鋳型、つまり、LCSができあがる。そして、このLCS内の各項が統語領域に写像されるのである。

ここで、例えば、x項として「太郎」、y項として「ロープ」を選択したとしよう。すると、イベント構造で語彙意味鋳型[x ACT $_{<MANNER>}$ y]または[x CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]]が選択され、x項とy項の意味的同定が行われる。その結果、[x ACT $_{<MANNER>}$y to have y separated]または[x CAUSE [BECOME [y <*separated*>]]]という具体的なLCSが得られる。そのあとで、LCS内のx項とy項が、それぞれ主語と目的語として統語構造に写像されることとなる。この場合、「太郎はロープを切った」という他動詞構文が得られ、解釈は動作動詞としての解釈か、あるいは状態変化動詞としての解釈が得られる。また、x項は随意的なので、イベント構造でx項の同定が行われない場合もある。語彙意味鋳型[x ACT $_{<MANNER>}$ y]においてx項の同定が行われないと、これは(14)の制約に違反することとなるため、この場合は動詞が動作動詞としての解釈は持ち得ない。他方、語彙意味鋳型[x CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]]の場合は、x項の同定が行われなくても(14)によって排除されず、y項だけに関して同定が行われ、[BECOME [y <*separated*>]]というLCSを持つ状態変化動詞となる。その結果、このy項が統語構造に写像され自動詞構文「ロープが切れた」が生じる。

次に、x項として「太郎」、y項として「ケーキ」を選択した場合について見てみよう。一見、この場合もy項として「ロープ」を選択した時と同じことが起こると思われるが、事情は若干異なる。項の同定が行われる鋳型が[x ACT $_{<MANNER>}$ y]のときは同じであるが、鋳型が[x CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]]のときはy項の同定は阻止される。なぜならば、この鋳型におけるy項は[BECOME [y <*STATE*>]]という概念と共起する資格を持たなくてはならないが、上で見たように「ケーキ」を切っても本質的な状態変化は起こり得ず、従ってこの資格を持たないからである。すると、y項が同定されないため(14)の制約に抵触することとなり、統語構造に項の投射が行われる前にイベント構造のレベルで排除されてしまう。この場合、「切る」が状態変化動詞の解釈を持つことができず、よって「ケーキが切れた」という自動詞構文も生じない。

以上、本節では、「切る」で自他交替が許される場合と許されない場合とではLCSが異なり、このLCSは項の意味選択によって決定されることを見てきた。さらに、この「切る」「切れる」という自他交替の分析が動詞のイベント構造を語彙項目の外に独立したレベルとして仮定するモデルの動機付けとなることを主張した。

4．まとめ

本稿では、日本語の「切る」という動詞の自他交替現象について考察することにより、動詞の統語的振る舞いの決定に関わる意味は、主語の特性（動作主かどうか、意図性があるかどうか）ではなく、目的語として生じる項の意味特性によって、ある程度決定されることを主張した。ここでの分析は、小野（2000）における同様の主張を支持するさらなる証拠を与えるものである。しかし、本稿では、小野（2000）と異なり、動詞の統語的な振る舞いを左右する決定的な要因が動詞のLCSであるということを主張した。本稿の分析では、目的語として生じる項の意味特性が、直接的に統語構造を決定するのではなく、イベント構造で動詞が結びつけられるLCSを決定し、その後でこのLCSが統語構造を決定する。そのため、出来事（event）を表す動詞のみでなく個体を表す項においても事象構造を仮定するという、小野（2000）の不自然な仮定を避けることができた。そして、この分析が、イベント構造を独立したレベルとして語彙項目の外に仮定するRitter and Rosen（1996）で提案されているようなモデルを動機づけるということも示唆した。Ritter and Rosen（1996）の用語を借りると、英語のcutという動詞はstrong predicateであり、日本語の「切る」はweak predicateである。実際、英語では道具の使用を伴うという含意が必ずあるが、日本語では必ずしも含意されない。また、日本語の「切る」は、切断という意味の他にも「野菜の水を切る」や「誤って指を切る」、「縁を切る」、「電話を切る」などというように、非常に多くの意味を持ち広い文脈で用いられる。これは、英語のcutとは対照的であり、日本語の「切る」がまさにweak predicateであり、語彙項目において行われている指定が緩いということを示しているのである。

参考文献

Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Kluwer.

Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser. (1987) "A View from the Middle," *Lexicon Project Working Papers 10,* Cambridge, MA: Center for Cognitive Science, MIT.

影山太郎（1996）『動詞意味論—言語と認知の接点』東京：くろしお出版.

Levin, Beth. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation,* Chicago: The University of Chicago Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. (1989) "An Approach to Unaccusative Mismatches," *CLS 25,* 314-329.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface, Cambridge,* MA: MIT Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. (1998) "Morphology and Lexical Semantics," in *The Handbook of Morphology,* ed. Andrew Spencer and Arnold M. Zwicky, Oxford, Blackwell.

Levin, Beth and Tova R. Rapoport. (1988) "Lexical Subordination," *CLS 24,* 275-89.

中村捷（1995）『X'意味論の研究』（平成5・6年度　科学研究費一般研究(C)研究成果報告書）

小野尚之（2000）「動詞クラスモデルと自他交替」『日英語の自他の交替』1-31, 東京：ひつじ書房.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1996) "Building Verb Meanings," ms., Bar Ilan University and Northwestern University.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (n.d.) "Two Types of Derived Accomplishments," ms., Bar Ilan University and Northwestern University.

Rapoport, Tova R. (1988) "Lexical Representation and Resultatives and Depictives," Paper presented at TCILS Workshop, Brandeis University.

Ritter, Elizabeth and Sara Thomas Rosen. (1996) "Strong and Weak Predicates: Reducing the Lexical Burden," *Linguistic Analysis 26,* 29-62.

Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface,* Dordrecht: Kluwer.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy,* Ithaca, New York: Cornell University Press.

鷲尾龍一・三原健一 (1997)『ヴォイスとアスペクト』東京：研究社出版.